

〈著者からひとこと〉

『フランツ・ローゼンツヴァイク——生と啓示の哲学』

丸山空大著

慶應義塾大学出版会 二〇一八年十月

本書は、ドイツのユダヤ人思想家フランツ・ローゼンツヴァイク（一八八六—一九二九）に関する筆者のこれまでの研究をまとめたものです。彼の思想の発展を青年期から最晩年まで辿る、思想的伝記とでもいえるべき構成になっています。

ローゼンツヴァイクは一般に、主著『救済の星』において、それまでの西洋哲学を自己言及的で自閉した思想体系として批判しつつ、宗教的概念を取り入れた独自の哲学を展開した思想家として知られています（この点でレヴィナスに大きな影響を与えました）。これまでの内外の研究も、同書に関心を集中させてきました。しかし、同書は多様な解釈を許容する難解（で不親切）な書物であったため、研究の蓄積にもかかわらず、彼はそもそも何を考えたのか、何をしたかったのかという基本的な部分は見えにくいままでした。

このような研究状況をふまえ、本書は、ローゼンツヴァイクが残した多くの書簡や日記、草稿類を、同時代的、個人史的コンテクストのなかで読み解くことで、彼の思想や実践（宗教教育や宗教テキストの翻訳）を貫く根本的な動機を明らかにしました。とりわけ、若年期の決定的体験——キリスト教への改宗の決断とその撤回——における理論的、実存的関心の所在、そして、最晩年にみられる生活全体の宗教化ともいえるべき独特の

境地の内容を解明したことは大きな成果だと自負しています。

また本書は、一人の近代人の精神的遍歴を同時代人と比較しながら辿ることで、近代西洋的自我と宗教の複雑な関係の一端を、思想、実践の両面から明らかにしました。彼の思索や実践は、端的にいえば、ドイツ社会でユダヤ人であることの意味をめぐる問いに向き合い、自分なりの答えをみつけてゆく道でした。それは、近代市民社会における宗教的、民族的マイノリティの一員として、自己と宗教や民族性の関係を問い直すことにほかなりません。彼が経験した葛藤のなかには、世俗化、相対主義、宗教や伝統への回帰、伝統の再構築といった、近代人と宗教をめぐるさまざまな問題を集約的にみることができ

ます。

本書は近代ドイツ・ユダヤ人社会や彼らの思想を主題とするものですが、近代知識人と宗教の関係、マイノリティのアイデンティティ形成、世紀転換期ドイツの知的状況といった問題に関心をもつ方々にも興味深いものとなっていると思います。

（丸山空大）

